

# 生と死

## 生と死―与えられた命はひとつ

イザヤ書 四四・一一八

ヨハネによる福音書 一一・二〇―三三

沖村裕史

人はなぜ、苦しむのか。

神はなぜ、人が苦しむのを許されるのか。預言者イザヤを通して神が語りかけている人々は、苦しんでいました。私たちもまた、そんな思いに陥ることがあります。苦しいとき、愛する人が苦しむとき、心に浮かぶ当然の問いです。病の苦しみ、喪失の苦しみ、そして何にもまして耐え難い、死の苦しみ。自分の苦しみも堪え難いものですが、大切な人が苦しんでいる姿を見るのは、実につらいものです。神がおられるなら、なぜ、苦しみを放置なさるのか。自分はこれだけ頑張ったのに、神の言葉を信じて歩んできたのに、何の恵みも祝福も、何の成果も結果も一向にもたらされない。自分のことはもちろん、神もまた、結局のところ何の役にも立たないではないか。信じることでできるものなど何一つない。こんな苦しみを味わうことになる人生にいったいどんな価値が、意味があるというのか。これほどの苦しみに喘ぐほかない私とは、そもそもいったい何者なのか。自らの存在の意味を、意義を問いかけるイスラエルの人々の疑いと問いは、私たちの疑いであり、問いでもあります。

その問いに、神は、イザヤ書一一二節で、

日本基督教団  
 塚口教会  
 〒661-0012  
 尼崎市南塚口町  
 2丁目34-3  
 電話 06-6429-3019

私たちはすべて、神によって造られたもの、つまり、私たちのいのちは神に与えられたものである、と言われます。思えば、私たちの誰もが気づいた時には、もうすでに、このいのちを生きておりました。自分の意志や力で、この世に生を享けたものは誰一人おりません。自分の死が訪れるその時のことを知ることのできる者もおりません。その意味で申し上げるなら、生も死も、私たちはそれをいささかも自由にすることなどできません。心静かに、素直にこれまでの来し方を振り返るならば、私たちの人生はただ、生かされて生きてきたものとしか言いようのないものです。私たちはすべて、「生かされて生きている」存在であるという真理を、聖書は教えています。

しかも、その与えられたいのちゆえに、神は私たちを愛し、選んで下さったのだ、と聖書は繰り返して語ります。私たちが愛されるにふさわしい者だからではありません。神は今、そのことを思い起こさせるために、イスラエルの民のことを「ヤコブ」という一般的な呼び名の他に、「エシユルン」という名で呼ばれます。エシユルンとは神に対して「まっすぐな、律法を守る者」という意味で、神を「押しつけ、欺く者」という意味を持つヤコブという呼び名とは対照的です。ここに、イスラエルの民が、どれほど愚かで罪深い者であっても、神に立ち返ることを期待し続け、決して見放されることのない神の愛が示されています。

六節にも、印象深い言葉が記されています。「わたしは初めてであり、終わりであります。」

という言葉です。この言葉が言わんとすることは、神は、いのちと初めと終わり、生と死を超えてすべてのものを司るお方、いついかなる時にも、つまり生きていたときにも死んだ後も、共にいて下さり、「今ここ」に、私たち一人ひとりに働きかけて下さる神なのだ、ということなのです。

であればこそ、なお問わずにはおられません。神が愛であるならば、なぜ、苦しみを創りになったのか。それも、苦しみの中でも最も大きな苦しみ、死をお創りになったのでしょうか。

この世界は、神の失敗作なのか。そうではありません。本来は、苦しみのない世界を創ろうとしたのに、そうできなかったというのではありません。神が愛であり、全能であるにもかかわらず、現に苦しみがある以上、神は苦しみを含めてこの世界を創造し、すべてをよしとされたのだ、と受け入れるほかありません。神のご計画であるならば、苦しみに必ず意味があるはずで、す。それも、何かとてつもなく「よい」意味があるに違いありません。仮にこの世からすべての苦しみを取り除いたなら、そこに本当の幸せが訪れるのでしょうか。病も障害も、失意も痛みも、死さえも取り除いた世界に果たして、いたわりの愛や憐れみの心、試練に耐える成長や、苦難の中で輝く希望が生まれるでしょうか。

そもそも、苦しみを創造されたということとは、創造主である神ご自身が苦しむことを引き受けられたということでもありません。親は子を生むときに苦しみます。わが子もまた苦しむことがあると知っています。それでも生むのは、わが子に存在を与え、愛し愛されたいからであり、わが子の苦しみを全面的に共にする覚悟があるからです。難病のわが子を抱きしめる親は、決して「生まなければよかった」とは言わない

でしょう。「生まれ生きてくれてありがとう」と言い、「代わられるものなら代わってあげたい」と言うことでしょうか。それは、自分のいのちすら惜しまないということであり、その心こそ、いのちの主である神の愛です。事実、いのちの神はその愛を、イエス・キリストの十字架において、現実のものとなりました。「代わって下さった」のです。すべてわが子の苦しみを、イエス・キリストにおいて共に苦しむことで、すべてわが子と一つに結ばれることを願われ、イエス・キリストのよみがえりによって、私たちが新たに生まれ、「永遠のいのちを得る」ことを望まれました。死が終わりではなく、始まりであるという希望を、私たちに示して下さい、あらゆる闇と恐れから救って下さったのです。

そのことをヨハネが伝えてくれます。神の独り子イエス・キリストは、自らの死を告げながら、こう教えられました。

「一粒の麦は、死ねば多くの実を結ぶ。」

未だ死んでいない私たちにとって、死は怖いものです。貧しい脳で、限られた知恵で、死のことを考えると、ちっけな自我は震え上がり、思わず、己が儂き殻にしがみつきます。しかし、恐れれば恐れるほど、いつそう信仰が必要となり、信じるしかなくなっていくます。そうして、ただひたすらに信じます、自分が新芽を秘めた種であることを。死の幻を打ち砕いた復活のイエス・キリストこそ、凍った冬にまことの誕生をもたらすために到来した、春そのものであることを。

生と死とが、永遠のいのちにおいてひとつであるように、神の愛の内にあつては、絶望と希望すら、ただ一つの恩寵の裏表なのです。

(二〇一五年一〇月二五日、三位一体後第二主日・秋の伝道礼拝Ⅱ)